

10 滋陰劑

滋陰劑は陰虛証を治療する方劑である。滋陰は育陰、養陰、補陰あるいは益陰などの用語と同義である。

陰虛とは津液（陰液）が不足した状態である。生理的な状態では陰と陽とは互に均衡し、相互に協調し合う一方、制約し合っている。陰液は寒であり、陽氣は熱の属性を有している。今陰液が不足すると陽氣は陰液の制約を失い陽亢となり、虚熱、即ち陰虛火旺の症状を呈する。

陰虛の一般的な症状は五心煩熱、午後の潮熱、口渴がある。舌質は柔かく紅いか、深紅色で無苔（鏡面舌）である。脈は細数である。陰虛の病態を現代医学的に見ると栄養不足と脱水により代償性の異化亢進を呈し、発熱した状態である。

陰虛をさらに詳細に見れば、

心陰虛では心悸、健忘、不眠、多夢。舌質淡紅で苔少く、脈細弱。基本処方天王補心丹（党参、玄参、丹参、茯苓、五味子、遠志、桔梗、当帰、天門冬、麦門冬、柏子仁、酸棗仁、乾地黄）である。

肝陰虛では眩暈、頭痛、耳鳴、夜盲、振せん等があり、舌質紅で乾燥し、弦細数の脈を呈する。基本処方杞菊地黄丸（枸杞子、菊花、熟地黄、山茱萸、山薬、沢瀉、茯苓、牡丹皮）である。

肺陰虛では咳喘、血痰、盜汗、不眠、頬紅、咽乾口燥、嚔声等があり、舌質は紅く苔は少く、脈細数である。基本処方百合固金湯（百合、乾地黄、熟地黄、麦門冬、白芍、当帰、貝母、生甘草、玄参、桔梗）である。

腎陰虛では、足腰が倦く痛い。遺精、眩暈、耳鳴、難聴、不眠、健忘、口乾等の症状があり、舌質は紅く苔は少い、脈は細で基本処方六味地黄丸（熟地黄、山茱萸、山薬、茯苓、沢瀉、牡丹皮）である。

脾陰虛は口唇乾燥して煩渴、食欲減退し失味、便秘がある。舌質乾紅、無苔あるいは地図舌を呈する。

基本処方としては參苓白朮散（人參、白朮、茯苓、山藥、扁豆、蓮肉、桔梗、薏苡仁、縮砂、甘草）を用いる。

六味丸（漢方常用処方解説190頁参照）

組成

熟地黄、山茱萸、山藥、沢瀉、茯苓、牡丹皮。

病態

腎は水分代謝を支配する（腎主水）と共に、五臓六腑の水穀の精氣（後天之精）を収蔵している（腎蔵精）。腎陰は腎精より生成される。腎に精氣が充実していれば、いわゆる、「陰平ナレバ陽秘ス」の状態、五臓の生理機能は安定して互に調和を保ち、病が発生することはない。

勞倦過度、大病、或は房事過度などはいずれも腎精を損耗し腎陰も不足する。腎陰が不足すると、腎陽（命門之火）を制御することが不可能となり、相火（異常な熱）が亢進し、陰虛内熱の症状を現わしてくる。本方は腎陰を滋補し、陰液を増やし、水気を旺んにして、陽氣、熱邪を抑制する（壯水制火）代表的方剤である。

本方は北宋の小児科の名医錢乙（1035～1117）の創製に成る処方であるが（本方の収録されている『小兒藥証直訣』は1107年頃の編纂とされる）、錢氏は小児の体は純陽に属し、陰が未発達で、まだ充実していないのが特徴であるので、小児では腎陰不足の証を見ることが多い。従って小児の滋補では腎陰を補うことを基本とすべきであるとし、『金匱』の八味腎氣丸より大辛大熱の桂枝と附子を去り、温腎補陽の剤を補陰の方剤に創り替えた。

後世、多くの学者がこの錢乙の考え方を敷衍し、全般的な養陰滋補の基本方剤とするに至り、その応用範囲が拡大され、頻用されるようになった。

註）「腎ハ精ヲ蔵ス」には二通りの意味がある。